

## 平成30年度第1回 高松市立病院を良くする会 会議録

開催日時：平成30年7月19日（木）15時～17時

場 所：高松市民病院 西会議室

### 【出席者】

（委員） 会 長 谷田 一久（株式会社ホスピタルマネジメント研究所 代表）

副会長 神内 仁（一般社団法人高松市医師会 会長）

藤田 徳子（株式会社フェアリー・テイル 代表取締役）

吉田 静子（高松市婦人団体連絡協議会 副会長）

和田 頼知（有限責任監査法人トーマツ 公認会計士）

（事務局）市職員29名

（傍聴者）7名

### 開会 15:00～

#### 1 病院事業管理者挨拶

いよいよ、8月5日にみんなの病院の開院式を迎える。約4年の遅れはあったが、職員の努力もあって、ようやく新病院開院に辿りついたところである。

本日は、各病院長及び診療所長から、平成29年度の実績と平成30年度の目標を、また、経営企画課から平成29年度の決算概要を、最後に新病院整備課から新病院の整備状況に係る報告を予定している。活発に議論をしていただき、高松市立病院が次のステップに移れるよう御支援をいただきたい。

#### 2 議題

##### （1）高松市病院事業経営健全化計画の具体的取組状況（平成29年度実績）について

##### （ア）高松市民病院

##### 高松市民病院院長 説明

（資料：昨年度の自己評価と今年度の目標）

（会長）

救急車受入件数はこれまで横ばいだったにもかかわらず、現在は県中、日赤に迫る勢いだが、院内でどのような変化があって達成できたのか。

（市民病院院長）

常勤医師数が37人から43人に増加したということが大きい。

（市民病院副院長）

院長の発言のとおり、一番の要因はマンパワーの充実である。質も含めて、救急において重要な科の医師が充実した。また、断らないという実績を作ったことで、要請件数が増加していることも大きな要因だと思う。

(会長)

職員は非常に充実感を持って業務に臨んでいると思うが、少ない人数でこれだけの受入率を達成することは、職員にとって負担ではないか。

(市民病院副院長)

精神的には非常に充実しているが、肉体的には疲労している部分もあるので、そこは今後検討していく必要があると考えている。

(副会長)

受入拒否という表現は誤解を招きかねないが、実際には専門の医師がいなかったり、同時に2台、3台の救急車が来る場合もあったりと、受入困難になる状況は多い。市民病院の規模でいうと、受入拒否の割合が2割前後というのは非常に素晴らしい数字である。職員の方が頑張っているために達成できた数字だと思うが、近年、医師の労働環境も問題になっている。今後は職員の働き方についても考えていかなければならないのではないかと。

(会長)

救急車の利用について、市民の救急車の利用は適正か。

(市民病院副院長)

数%程度、不適切だと思う利用がある。そういった利用者によって、職員は束の間の休息が妨げられることにストレスを感じている。

(会長)

この問題については、病院や救急隊だけではなく、市全体で解決法を探っていく必要がある。また、現場の職員が地域に出向き、救急車の適切な利用について講座を設けることも効果的ではないか。

(委員)

12月以降、月別の連携医療機関訪問件数が減少している。新病院に移転してからも紹介率、逆紹介率を保つためには、もっと訪問しないといけないのではないかと。

(市民病院副院長)

12月以降、減少している要因は、市内の医療機関は訪問し尽くしたためである。4月以降、

新たな地区の病院を訪問しており、件数としては1月20件前後訪問している。

(委員)

地域の病院としては、何回も訪問してくれた方がいいのか。

(副会長)

忙しい先生方が来られるので、2回、3回と来られると非常に恐縮してしまう。

(委員)

営業の視点で言えば、恐縮されるくらい行くのが重要だと思う。また、誰が行き、どういったプレゼンをするのかが重要だと思うがどうか。

(市民病院副院長)

訪問については各科の診療部長が行っている。プレゼン内容としては、詳しい診療内容や当院の得意としている症例や治療等について詳しく説明している。

(委員)

新たな資料が無くても、訪問に行ったということが重要だと思う。ぜひ地域に根ざした病院として、これからも顔が見える営業をしていただきたい。

(会長)

市民病院のがん医療については、すばらしいと思うが、あまり数字が伸びていない理由はあるのか。

(市民病院院長)

放射線治療については設備の問題もあり、現時点で大幅な増加は難しいと思っているが、新病院に移転してからは PET-CT やリニアック等の設備も充実する。また、やはり患者を紹介していただくことが重要なので、当院のがん治療に力を入れているということを強くアピールしていきたい。

(委員)

病院によっては、院内でがん治療の実績等を多く掲示しているところもある。院内の美観への影響もあるが、インパクトのある宣伝も考えなくてはならない。

(副会長)

がん治療については、現在ハード面での整備が非常に重要になっている。そのため、新病院に移転した後は、数字が伸びていくと期待できると思う。

(会長)

今後、日本において国民の2分の1が、がんになるという推計もある。今後、市民病院が目指すがん診療はどういったものか。

(市民病院院長)

キャンサーボードを充実させるなど、がん治療のレベルを上げていきたい。そうすることで患者も増加すると考えている。

(会長)

市民病院に対するがん治療、がん患者への取組については、非常に期待されているので、頑張ってください。

#### (イ) 高松市民病院塩江分院

##### 塩江分院院長 説明

(資料：経営健全化計画の具体的取組状況 平成29年度実績と平成30年度目標)

(委員)

入院や外来患者数が減少しているが、塩江町内の住民数はどうか。

(塩江分院事務局長)

人口は2,700人程度で、毎年100人前後減少している状態である。

(病院事業管理者)

塩江分院では「地域まるごと医療」を基本方針に掲げ、高齢化及び人口減少という地域の特性を反映した医療、介護をどうやっていくかということを職員一同が考え、取り組んでいる。塩江分院だけでなく、地域のケアマネさんやヘルパーさん、民生委員の方々が一体となって、患者が最期まで幸せに暮らすことをサポートしていくものである。いかに患者が最期まで心穏やかに過ごせるかが重要であり、塩江分院の取組は全てそのために行っているものである。

(会長)

塩江分院が高齢化していく地域におけるケアのあり方の最先端を実施している、と理解している。そうすると、その塩江分院の取組が損益計算に反映されてくると思うが、損益計算の中の実質収支という表現が気になっている。実質とは何か。

(塩江分院院長)

補助金や繰入金を除いた状態での収支という意味である。

(会長)

目的や基準があつて繰り入れているのだから、それを含めた数字こそが「実質」なのではないか。他の自治体では使わない表現であり、誤解を招きかねない言葉である。

(病院事業管理者)

塩江分院の存在自体が不採算であると認識している。そのため、塩江分院に採算性を求めること自体が自治体病院の趣旨から外れていると思うが、民間病院は税金を払いながら運営しているのに対し、自治体病院は税金を受け取りながら運営している。その税の投入に対する責任を職員に認識してもらうために、当初実質収支という数値を算出していた。ただ、実際の経営指標としてはここ数年、使用していない。にもかかわらずそういった数値を未だに資料に記載していることについては、職員が成熟できていない部分であり、そこを変えていかなければならないと思っている。

(委員)

塩江分院の写真を見ると建物の老朽化が進んでいるように見え、心配である。病床利用率も下がっているようだが、今後の建替えや病床数の検討も必要なのではないか。

(塩江分院院長)

その通りである。塩江分院は昭和54年に建築されており、かなり古くなっている。病床についても、建物の構造上、効率的な使用ができないという問題もある。

(病院事業管理者)

現在、塩江分院の整備については病床数を含め議論しているところである。移転先についてはほぼ決定されているが、病床の有無、有床とする場合は何床か、という部分については現在検討中である。

#### (ウ) 高松市民病院附属香川診療所

香川診療所所長 説明

(資料：経営健全化計画の取組について 平成29年度実績・平成30年度取組)

(委員)

今、香川診療所で勤務している職員は全て、みんなの病院に異動するのか。

(香川診療所所長)

医療職については、医局の医師配置の問題であったり、年配の看護師さんもいたりするので、全員が異動するわけではない。事務職員は全員異動する。

(委員)

これだけの活発な取組を行っている診療所の職員が、みんなの病院に異動せず、引継ぎはきちんと行われるのだろうか。「私のカルテ」も坂出市立病院では7、8千件発行していることから考えると、香川診療所の4千件近い数字は素晴らしい。そのような活発な取組は継続されるのか。

(香川診療所所長)

必ずしも、全ての取組が継続されるものではないと伺っている。

(病院事業管理者)

当然、香川診療所の「私のカルテ」や公開講座、地域に出向いての健康教室といった良いDNAは全て受け継ぐものであり、既に市民病院でも「私のカルテ」を発行している。職員に関しても、個々の希望はあるので強制できるものではないが、基本的に希望する職員は全てみんなの病院に異動するという方針でやっている。ソフト面もハード面もしっかり引き継ぎ、市民の皆様から、「みんなの病院があれば安心だ」と思っていただけの病院にしていかなければならない。

(会長)

香川診療所のアクティビティの高さは市民にとって非常に素晴らしいものである。この会の名前からもそうだが、市民病院をより良くするためには、香川診療所の良い部分を丸ごと、より発展する形で引き継いでいただきたい。

(病院局長)

香川診療所の取組について、基本的にはみんなの病院に引き継ぐ方針ではあるが、急性期医療を担う性質上、全て引き継ぐことは困難であることも認識いただきたい。

(委員)

今まで手書きで行っていたものを電子化する、というように効率的な仕組みの構築を考えなければならない。

また、市民は洗練された技術だけを求めているわけではなく、市民に寄り添った病院を求めている。イベントや情報発信、先生の顔が見えるコミュニケーションといったものを要求している。「みんなの病院」という名前から市民がイメージすることは、そういった取組ではないのか。

(病院事業管理者)

病院事業管理者として、香川診療所の良いところは引き継ぎ、市民病院と香川診療所の長所をあわせたみんなの病院にする、ということが基本的な方針であり、当初から職員にもそのよ

うに指示している。実際に市民病院の医師や看護師が香川診療所の職員と共に健康教室に参加しており、それがその取組が進んでいる証明である。香川診療所の職員が全員異動してこないことで、その取組が途切れることはない。

(副会長)

例えば、香川診療所で小児夜間救急を行っていたが、高松市内1次の夜間救急患者は、高松市夜間救急診療所で受け入れる、というシステムになっているため、みんなの病院が小児夜間救急を引き継ぐことはできない。そのようにシステム的に全てが引き継げないという部分は当然出てくるだろう。

(会長)

管理者の説明のとおり、香川診療所の取組は受け継がれていく、という認識を共有したい。「私のカルテ」も、スマホで使えたり、病状説明のDVDがついたり、他市では進歩している。みんなの病院においても、より良い進歩を目指していただきたい。

(病院事業管理者)

時間の都合上、議題2は省略し、新病院整備の説明をする。

### (3) 新病院整備状況について

病院局次長 説明

(資料：高松市新病院整備について)

(会長)

新病院については、百聞は一見に如かずである。ぜひ皆さんも足を運んでいただきたい。最後に、管理者から御挨拶をいただきたい。

(病院事業管理者)

この8月末をもって、病院事業管理者を退任することとした。今後は和田院長にバトンタッチすることになるが、委員の皆様においては、これからも市民病院がより良いものになるよう、御支援、御協力をお願いしたい。

(会長)

これから職員の皆さんには、病院事業管理者の市民病院に対する思いを受け止め、より良い病院になるよう、生かしていただきたい。

以上で、平成30年度第1回の高松市立病院を良くする会を閉会する。

閉会 17:00